

## 3) 部 会

## 被服整理学部会

部会長 尾畑 納子

## 1. はじめに

被服整理学部会は1967年(昭和42年)に発足した被服整理学研究委員会を母体として設立された。初代委員長には(故)矢部章彦先生が就任され、草創期の部会は、全国から多くの被服整理学関係者が研究会のメンバーとなり、被服整理学の学問体系化を中心として基礎が築かれた<sup>1)</sup>。発足から41年を経た今日でも研究会発足時の精神は引き継がれていて、毎年の夏季セミナーでは、宿泊しながら研究交流が行われている。部会長は部会総会で選出され、任期は2年とし、毎年日本家政学会年次大会時に部会総会を開催し、年間の事業運営について意見交換を行う。なお、1998年以降の部会長は、就任順に片山倫子先生、杉原黎子先生、駒城素子先生、多賀谷久子先生、尾畑納子で現部会長は21代目になる。2008年5月現在の会員数は124名で、この10年間でやや減少傾向にある。こうした背景には、近年の大学や被服分野を取り巻く環境の厳しさなどが影響しているものと考えられる。

本部会の目的は、会則第3条に「被服整理学およびこれに関係する分野の研究者の全国的な交流を深め、学術的成果を高め、その研究を促進すること」としており、現在もこの精神に則り部会活動を行っている。主な事業として、科学研究費補助金による共同研究の実施と夏季セミナーの開催などがあげられる。

## 2. 被服整理学部会の活動

## (1) 被服整理学部会における共同研究

科学研究費補助金による総合研究は、被服整理学分野に課せられた今日的なテーマを会員相互で考え、共同研究を行うことで成果をあげている。近年は、夏季セミナーに参加した会員らで共同研究に関するテーマやアイデアを話し合い申請を行っている。採択された研究成果は報告書にまとめ、部会員に配布したり、セミナーや家政学会の部会企画として発表している。表1には1998年以降の総合研究のテーマを掲載する。

## (2) 被服整理学夏季セミナー

部会設立の翌年、丹波峰山で第1回が開催された。以来、ほぼ毎年開催されている夏季セミナーは2007年度で37回を迎えた。ここ10年間のセミナーの形態は1泊2日で交通事情のいい駅近くの宿泊施設を利用して講演中心に行われている。参加者はおよそ60~70名程度で推移しており、過去の参加者数に比べてやや減少傾向にある。2001年(東レ総合センター)、2003年(実践女子大学)は被服関係部会の合同夏季セミナーが実施され、また2005年には被服関係部会と韓国衣類学会との日韓合同セミナー(被服整理学部会員9名参加)がソウルで開催された。以下には、第31回以降の被服整理学部会単独で開催された夏季セミナーの講演題目を掲載する。

【第31回】1998.8.20-21 (パナヒルズ大阪)

「界面活性剤溶液の物性」/「新規界面活性剤グルカミ

表1. 被服整理学部会における共同研究

研究期間	研究種目	研究課題	研究代表者
1998	総合研究 (C)	洗濯行動における環境ライフサイクルアセスメントの適用研究	永山升三
2001-02	総合研究 (B)	水洗い不可衣料品の湿式洗濯に関する基礎研究	駒城素子
2001-02	総合研究 (B)	天然染料の新展開—自然の色の再生に向けて	牛田 智
2002-03	総合研究 (B)	生活排水への負荷低減のための洗浄システムの研究	大浦律子
2005-06	総合研究 (A)	洗浄試験法に関する知識ネットワークの構築	大矢 勝
2007-08	総合研究 (A)	LCA 思考に基づく家庭洗濯の環境負荷削減に関する研究および教育支援プログラムの開発	山口庸子

ドの開発について] / 「染色加工の最近の話題」 / 「PET ボトルにみるリサイクルの動向」 / 「ペルオキシダーゼを触媒とする色素の色移り防止」 / 「アパタイトへのタンパク質の吸着」 / 「環境にやさしい家電製品の開発」

【第32回】1999.9.2-3 (ラフォーレ東京)

「界面電気現象と洗浄」 / 「情報化・消費化社会の現状と未来」 / 「21世紀地球人口100億人時代の被服整理学を考える」 / 「繊維産業の立場から」 / 「洗剤業界の立場から」 / 「クリーニング業界の立場から」 / 「ポリエステル之光グラフト重合による表面改質」 / 「これからの染色科学」 / 「漂白剤の技術動向」

【第33回】2000.8.29-30 (琵琶湖ホテル)

「古代の繊維と染料を訪ねて—保存科学の立場から」 / 基調講演「水系でどこまで洗えるか—水系洗濯性能評価について」 / 「水系洗濯に対応するアパレル製品の設計—紳士服とウェットクリーニング」 / 「水系洗濯対応素材の開発」 / 「商業洗濯におけるウェットクリーニングシステムの開発」 / パネル討論「水系でどこまで洗えるか—水環境と洗剤」 / 「繊維染色に関わる種々の環境問題—着色排水を中心として」 / 「琵琶湖の生物群集と物質循環：何が問題なのか？」

【第34回】2002.8.26-27 (東京飯田橋ホテルエドモント)

「江戸時代の生活様式」 / 「21世紀における繊維産業と衣生活」 / 「今に生きる伝統染織技術」 / 「伝統染織のみなおし」 / 「羊毛と防縮加工について」 / 「ヨーロッパの洗剤・洗濯機の動向—wfk2001報告」 / 「水の物理化学」

【第35回】2004.8.30-31 (富山第一ホテル)

「今の加賀友禅」 / 「洗濯に関する新しい技術と今後の方向性」 / 「バイオサーファクタントの多彩な機能とその応用：洗剤から遺伝子治療まで」 / 「暮らしの中の富山の自然」 / 「生活排水への負荷低減のための洗浄システムの研究」 (平成14・15年度科学研究費補助金・基盤研究B(1)による研究助成報告) / 「酵素の開発と産業利用」 / 「環境に配慮した染色工業や染色技術に関する最新情報」

【第36回】2006.8.30-31 (京都ガーデンパレス)

「ナノスケールの加工技術と洗浄」 / 「光合成システムに学ぶ染色現象」 / 「アミノ酸系界面活性剤と皮膚との相互作用」 / 「美しい水辺環境の創生と洗浄」 / 「LCAの現状と洗浄研究への応用」 / 「草木染め加工の工業化」 / 「最近の仕上げ剤の動向」

【第37回】2007.8.29-30 (KKRホテル東京)

「ミャンマーの繊維産業」 / 「界面活性剤分子集合体と

エマルション・マイクロエマルションの最近の研究動向」 / 「最新型ドラム式洗濯乾燥機の解説とIEC洗濯試験法の現状」 / 「家庭洗濯の衛生的問題点とその対策」 / 「洗浄試験法に関する知識ネットワークの構築」 (平成17・18年度科学研究費補助金・基盤研究(A)による研究助成報告) / 「取扱い絵表示・ケアラベルの国際的な動向 (ISO 3758改正)」 / 「産地染色加工業の現状と課題」

### 3. 被服整理学の展望と今後の課題

1998年から2007年までの日本家政学会誌への論文投稿総数は被服整理・管理分野が32件、染色分野は16件、両分野を合わせると被服関係分野の中の25%を占めている。また、年次大会における発表総件数(259件)も論文とはほぼ同様の傾向にあるが、後半の5年間はポスター発表の件数が増えている。内容としては、洗浄や染色に関する基礎分野の研究はこれまでと同様<sup>2)</sup>であるが、環境科学領域との関連性の強いテーマも多くなっている。被服整理学領域において、地球温暖化防止対策や温暖化ガス削減などを取りあげた内容として、生産から消費、廃棄までの一連の過程で排出される二酸化炭素量を算出して消費者行動を分析するLCA手法を用いた研究が研究発表や夏季セミナーの講演に多くみられる。また、消費科学的な見地から洗浄力や機械力などの客観的な評価方法の検討もみられる。

電気洗濯機の多機能化や洗剤の高機能化、衣料の国際化による取り扱い絵表示の問題など複雑化しており、日常の衣類管理には、環境、安全、安心のキーワードに基づく生活科学の視点がますます重要である。これまでの40数年にわたる諸先輩方の基礎研究の成果を踏まえ、これからの被服整理学分野の研究が21世紀の「人と環境」のより良い関係を作り出すために重要な役割を果たすものと確信する<sup>3)</sup>。また生活科学という分野の性質上、研究の成果は学会員間の交流に止まることなく、広く一般の生活者への情報提供も不可欠である。そこで、部会では現在2つの事業に取り組んでいる。1つは、2007年度から牛田 智先生のご尽力により被服整理学部会専用のホームページ (<http://hifukuseiri.main.jp>) を立ち上げ、部会の活動を一般公開している。また、2つ目は部会員による研究成果を広く、小・中学校、高校などの家庭科教員や一般の生活者へ情報提供するため、公開促進費の助成を受けて、公開講演会を2003年、2005年、2006年の3回にわたり実施し、計429名の一般参加者を得た。

## 学会活動の回顧と展望

今後はさまざまな活動を通して被服整理学という分野が広く社会に認知されるよう、他分野領域との共同研究、ベテランと若手部会員が互いに知恵を出し合い活発に研究活動ができる開かれた部会として発展することを期待したい。

## 参 考 文 献

- 1) 岩崎芳枝：家庭科学研究, **212**, 1-21 (1996)
- 2) 田川美恵子：家政誌, **49**, 531-533 (1998)
- 3) 片山倫子：学術の動向, **12** (8), 54-57 (2007)

## 民 俗 服 飾 部 会

部会長 村 田 陽 子

昭和 43 (1968) 年民俗服飾研究を志す中嶋朝子氏ほかを中心とする有志が、「民俗服飾研究委員会」を構想し、小川安朗会長のもとに発足をみた。以降、国内外にフィールドワークを中心に、地域に発生し多様な生活条件に対応しながら独自に発展した服飾の実態を把握し、考察を重ねてきた。前回報告までの 30 年間に国内はほぼ二巡したので視点を変え、まとまりある地域に共通のテーマを設定した実態調査とした。

平成 10 (1998) 年～11 (1999) 年は、黒潮が運ぶ海の幸と服飾をテーマに、黒潮と共に太平洋沿岸に押し寄せる鰯・鯉漁が生んだ万祝に代表される海の服飾について伝播・変遷・地域性などを確認した。平成 12 (2000) 年は、信州・飛騨諸街道にみる服飾とし、中山道・北国街道などの要衝や宿場町において街道が育てた服飾文化を探った。続いて「近代の布」と題し、明治以降、近代工業の発展とともに我々に提供された各種各様の衣料素材もその役目を終え、身近から消えつつあるので、それらの果たした働きと恩恵を改めて確かめるべく、第一回銘仙、第二回モスリン、第三回続モスリンと染め木綿、第四回紡績糸・緋・緋文様の世界、第五回縮緬とその展開、第六回起毛織物のいろいろというテーマを設け、6 年をかけて調査・研究した。部会員相互に更なる研究への刺激を受け、意欲をかきたてられたことであった。平成 19 年度以降は、見学会に切りかえ、総会・研究発表会に続けて研修を実施することとした。見学先は再訪もあったが参加者の多くは初訪であり、それぞれの見学先においても見せ方、説明などに進化が見られ、より広く深い知識と理解を得ることができた。

また、グループ別に研究課題を選び、その成果を各年の研究発表会において口述発表し、論集に掲載しているが、麻グループは関東の一部を除き、ほぼ全県の調査を完了している。

しかし一方では、近年の大学における被服関連学科

の凋落は凄まじく会員数は減少し続け、かつ、現役教員数も僅少となり部会の存続は困難になった。平成 20 年度総会において今後の運営につき討議を重ねた結果、本年度を最後に部会活動に終止符を打ち解散することを決定した。部会結成以来 40 年、何かとご指導ご支援をいただいた日本家政学会本部および諸先輩方に対し衷心からの謝意を申し上げつつ、日本家政学会 60 周年記念号部会活動報告としたい。

以下にこの 10 年間の活動内容を 1. 部会長 2. 部会総会・研究発表会・講演会 3. 研修会およびセミナー記録 4. 見学会 5. 民俗服飾研究論集に分けて記述する。

## 1. 部会長

徳永幾久 平成 4～18 年

村田陽子 平成 19～21 年

## 2. 部会総会・研究発表会・講演会

平成 10 年 11 月 29 日 (東京家政学院中・高校舎) 研究発表 7 件, 九州及び三陸から房総地区研究調査報告 7 件, 平成 11 年 12 月 5 日 (東京家政学院中・高校舎) 研究発表 7 件, 駿河・伊勢・近江地区研究調査報告 2 件, 講演会「奥三河の旧商家の実態—古橋家を中心に—」元日本風俗史学会会長 芳賀登, 平成 12 年 12 月 10 日 (大妻女子大学) 研究発表 4 件, 信州・飛騨諸街道地区研究調査報告 6 件, 講演会「近代庶民の和服事情」服飾研究家 笹岡洋一, 平成 13 年 12 月 2 日 (共立女子大学) 研究発表 6 件, 講演会「明治・大正・昭和のきものにみる銘仙」服飾研究家 山下悦子, 平成 14 年 12 月 8 日 (共立女子大学) 研究発表 4 件, 講演会「モスリン友禅を中心とした京都の染色業」京都市染織試験場 野崎邦雄, 平成 15 年 12 月 14 日 (共立女子大学) 研究発表 4 件, 講演会「近代の布ときもの—再生への着想と着装—」ファッションデザイナー 赤野安, 平成 16 年 12 月 14 日 (共立女子大学) 研究発表 3 件, 講演会「ニコニコ緋を収集して—庶民